

別紙 4

| | | |
|------|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 |
| 号 | 号 | |

主論文の要旨

論文題目 清末における在日中国人女子留学生の出版活動

氏名 朴雪梅

論文内容の要旨

本論文は、清末（ただし、本論文では女子留学生が日本留学を開始する 1899 年から辛亥革命が起こり次々と帰国する 1911 年までを扱う）に在日中国人女子留学生たちが東京を中心として創刊した雑誌、つまり日本留学女子学生の出版活動史上、その端緒的役割を果たした『江蘇』の「女学論文／文叢」（1903 年）、『白話』（1904 年）、『中国新女界雑誌』（1907 年）、『天義報』（1907 年）、『留日女学会雑誌』（1911 年）を取り上げ、そこに見られる中国人女子留学生たちの近代思想（女子解放思想や政治思想など）及びその影響関係、彼女たちが求めた理想的女性像などを明らかにすることにより、彼女たちの留学活動の性格と意義を考察したものである。本論文は五章から成り、中国人女子留学生たちが東京を中心として創刊した雑誌をその記事内容にまで立ち入って検討した。以下に、各章の要点を整理して示す。

第一章「清末における中国人女性の日本留学と社会活動」では、在日中国人女子留学生の留学実態及び彼女たちが東京で行った結社活動と出版活動を中心に論じた。中国人女性たちは清朝政府の日本留学政策からほとんど除外されていたにもかかわらず、多くの女性たちが日本で学んだ。彼女たちの留学が可能になったのは、教育を受けようとする自らの意志、開明的な各省官僚の女子官費留学生の派遣及び日本側の積極的な受け入れ政策があったからである。一方、日本側教育機関の積極的な提供、協力の背後には、東アジアにおける日本の影響力を拡大しようとする政治的野心があったことにも言及した。また、東京における中国人女子留学生の結社活動と出版活動は 1903 年から 1907 年までの期間を中心に行われ、1908 年から 1910 年まではほとんど空白の状態であった。その後、1911 年に

は列強の侵略に反対する男子留學生の運動と連動して、清末における日本での最後の社会活動が行われた。本章では、このような動向は、1907年以後の男子留學生数の急激な減少とそれに応じた出版活動の低下と直接関わっていることを明らかにした。

第二章「初期中国人女子留學生と『江蘇』の「女学論文／文叢」」では、『江蘇』の「女学論文／文叢」に焦点を当て、初期中国人女子留學生たちの女子解放思想と政治思想、同時代の男子中国人留學生たち或いは留学先である日本の知識人との影響関係及び彼女たちが求めた理想的女性像を中心に論じた。胡彬夏（1888～1931）、何香凝（1879～1972）、林宗素（1878～1944）、陳彦安（生没年不明）、曹汝錦（生没年不明）など「共愛会」の會員たちは、当時男子留學生が創刊した雑誌『江蘇』に「女学論文／文叢」として自分たちの文章を発表し始めた。そこで彼女たちは女子教育の急務、また女権獲得の必要性について訴えるとともに、義務を尽くし、西洋女性たちを行動モデルとして見習い、救国或いは革命に積極的に参加することを中国二億の女性同胞に呼びかけた。彼女たちの文章は、中国人男性知識人たちが日本を通じて再構築した近代女子解放思想の影響を受けながらも、自力でさらに一步を進める内容をもっていたが、それは主に「女国民」として男性と同等の立場を求めること、自力で女権を獲得することなどの主張に現れていることを明らかにした。また、革命思想が鮮明となった第三号以降の『江蘇』に、女子留學生たちの「救国」と「革命」という対立する主張の共存を許したのは、男性知識人たちが、「救国」か「革命」かを問わず、女子教育を通してより多くの女性たちが立ち上がることを急務と考えたからであることも指摘した。

第三章「秋瑾の雑誌『白話』とその後」では、秋瑾（1875～1907）が中国人男子留學生とともに創刊した雑誌『白話』（1904年）及び帰国後に彼女が創刊した女性向け雑誌『中国女報』（1907年）を比較分析することによって、彼女の女子解放思想と革命思想が日本留学期（1904年7月から1905年12月）を通して、極めて大きな変化を遂げたことを論じた。留学する直前まで、秋瑾は婦人問題については関心を持たず、「洋風の男装」という徴表を用いて、異民族政府である清朝や男尊女卑の封建社会に対する反発を示した。しかし、日本留学中に「演説練習会」に参加した中国人男子留學生や日本の知識人たちの影響のもとで、次第に政治的自覚を深めていった秋瑾は漢人主体の「国民国家」の建設と、中国二億の女性たちの啓蒙を志すようになった。彼女は女性たちに教育の機会を与え、自立自活を実現し、また、赤十字会などに参加することによって男性たちとともに清朝政府を打倒するよう促す革命思想の担い手となった。秋瑾の死後、革命派は新聞や雑誌など様々

のメディアを通じて、このような秋瑾の革命思想と活動を大々的に宣伝した。その結果、秋瑾は中国における女性革命家の伝説的なヒロインとなったばかりでなく、女性たちを革命運動へと動員するもっとも効果的な宣伝媒体となったのである。本章では、このような秋瑾の履歴において日本留学が持っていた意義を考察した。

第四章「在日中国人女子留学生と『中国新女界雑誌』」では、『中国新女界雑誌』の発刊意図とそこに掲載された翻訳記事を分析し、中国人女子留学生たちが求めた理想的女性像を中心に論じた。編輯兼発行人である燕斌（生没年不明）をはじめ当時の中国人女子留学生たちが『中国新女界雑誌』を創刊した主な目的は、中国人女性たちを「女国民」に育成することであった。厳密な一次資料調査と分析の結果、彼女たちが求めた女国民像は、花木蘭（412～502）、梁紅玉（1102～1135）のように中国の史書に登場する女傑でもなければ、政治的にまだ独立した人格を持たず女性解放の萌芽的段階にあった当時の日本人女性でもなく、職業を得ることによって自身の独立を実現し、男性と同等に社会の表舞台に立って、直接国家に貢献できる女性、つまり女性解放の先頭に立って活躍するごく一部の欧米人女性たちであったことが明らかになった。在日中国人女子留学生たちは西洋の女子教育を日本の国情に合わせて再構成した日本の女子教育／女性論ではなく、西欧諸国の最新の女子教育／女性論を中国の女性たちに紹介しようとした。そして、清朝政府の改革に対応して、日本の女子教育に関する数多くの教科科目書を翻訳する際にも、その中に顕著であった「女は内」という性役割分業思想、家庭内での奉仕を通じて間接的に国家に貢献する「良妻賢母」思想についての内容をすべて削除し、男性と対等な「女国民」を育成しようとしたことを明らかにした。

第五章「何震の『天義報』と唐群英の『留日女学会雑誌』」では、主に1907年に何震（生没年不明）が創刊した『天義報』と1911年に唐群英（1871～1937）が創刊した『留日女学会雑誌』について考察した。『天義報』創刊当初の何震は「男権」を否定し、婚姻を中心とする男女関係の平等の実現に尽力したが、その後幸徳秋水（1871～1911）らの影響を受けて急速に無政府主義思想に傾倒し、第八・九・十号からは「世界主義」を主張するようになった。その論調は、女性が数千年にわたって男性に蔑視されていることを赤裸々に述べ、女性による封建礼法体制の破壊を提唱することから出発し（主に『天義報』の第五号まで）、その後は欧米の文明を偽文明として糾弾し、婦人参政権運動、女性の経済的独立、軍国主義を全面的に否定する（『天義報』第七号から第十五号まで）という過激な主張に転じた。その結果、『江蘇』の「女学論文／文叢」、『白話』、『中国新女界雑誌』などで主張

され続けた「女国民」の育成という大目的からの大きなズレが生じ、多くの女子留学生たちの関心や支持を急速に失って、孤立した状況に陥ったことを明らかにした。さらに、後半の第3節「唐群英と『留日女学会雑誌』」ではまず、唐群英をはじめ当時の女子留学生たちが男子留学生たちの組織した「留日中国国民会」に呼応する形で「留日女学会」の結成し、その機関誌である『留日女学会雑誌』を創刊するに至った経緯を概観した。また、『留日女学会雑誌』の分析によって、彼女たちの主張が「女学論文／文叢」以降の女子留学生たちの主張の主流を受け継ぐものであり、女子教育を通して女性の権利を回復するとともに、中国国内に存在する婚姻の弊害を改良し、経済的独立を実現することによって、二億の中国人女性たちが男性たちと連帯し、対等の国民として「救国」に立ち上がるように啓蒙するものであったことを明らかにした。この関連で、彼女たちが帰国後、赤十字活動を行ったことについても指摘した。

終章では、以上の各章の研究成果をまとめ、彼女たちの出版活動は日本の近代思想及び日本を経由した西洋の文明思想を積極的に中国に紹介し、近代思想の伝達及び中国人女性の覚醒に寄与したばかりでなく、その後の辛亥革命への貢献、中国人女性の参政権獲得運動、教科書編集にも重要な役割を果たしたと結論づけた。さらに、今後の課題として、

1. 本論文の成果と同時代の中国国内で創刊された女性誌との比較・検討、
2. 中国人女子留学生たちが注目した欧米人女性たちの伝記（日本語訳）を明治の男性知識人が翻訳した意図を明らかにし、その後の受容・影響を比較する、の二点を挙げた。